

井内山古戦場と小鴨神社おがも④

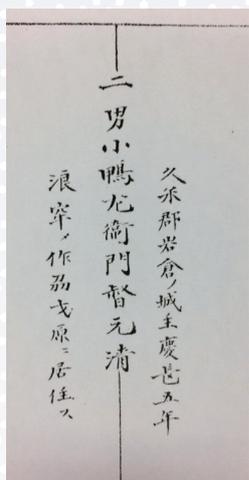
戦国時代末期に、安芸の毛利方に居城を落とされ、兄弟である南条元統の下に身を寄せた小鴨元清には、鏡野町域にまつわる後日談があります。

江戸時代の寛保二年（一七四二）にまとめられた『伯耆民談記』を再編した『伯耆民談記』という書物は、次のような伝説が掲載されています。

関ヶ原の合戦で西軍についた南条氏は滅亡し、小鴨元清は一子亀若丸



大町の集落

「羽衣石南条系図」(部分)の  
小鴨元清の箇所  
東京大学史料編纂所蔵

を連れて、作州の大町村（大町）に至りますが、そこで宿泊した家の夫婦は伯耆生まれで、元は小鴨氏の領地内に住んでいた百姓だったため、元清父子を歓迎します。元清はこの夫婦に亀若丸を預け、大町を出て才原村（上齋原・下齋原一帯）に宿泊しますが、その家の主人は元清を見て「これは身分の高い人だ。刀も高価なものでお金も持っているだろう」と悪心を起こし、隣家の者と共謀して強盗山賊を密かに招き、夜更けに熟睡している元清とその従者の刀を奪い、殺害してしまいます。その後、亀若丸は大町村で成人します

が、ある夜、夢の中に父元清が現れ「急いで津山の城下町まで来るべし。お前に授けたいものがある」という夢を続けて見たことで不思議に思った亀若丸は、津山城下町へ赴き、酒店で休んでいた時に何気なく古い刀を見て「これこそが夢のお告げだ」とこれを買って求めて家宝としました。この刀こそが元清が殺害された時に強盗に奪われた刀で、代々大町の小鴨家に伝えられている。

という話です。その他、元清は東京大学史料編纂所が所蔵する「羽衣石南条系図」には「浪牢シ作州才原二居住ス」とあったり、さらに興味深いのは『姓氏家系大辞典』によれば元清は、天正年中に吉川元春に襲われ、苦田郡井内山に戦死し、その子・千松は救われ、後に小鴨三郎右衛門正治と名乗った、という話もあります。

同じ肥後の大名である加藤清正の家臣となったという話もあり、熊本市の禪定寺には元清の名が刻まれた墓も存在するようです。いずれが正しいのかは、現段階で確認できる史料では判断が難しいところですが、実際に大町には江戸時代に大町村の庄屋を代々勤めた小鴨家が存在しますし、村尾氏と吉川元春という人物名や時代こそ違いますが「井内山合戦での戦死」や「才原」の地名など複数の史料から見られる共通のワードは単なる言い伝えではなく、小鴨元清かどうかは別として、これらの話の根拠となる人物や出来事が実際に存在した可能性を示しているのではないのでしょうか。そう考えると、鏡野町域と小鴨氏の関係は、井内山合戦や小鴨神社だけでなく町域北部一帯に深く関わってくるような一大事件であり、このように伝説化したのも当時の人々のインパクトがそれだけ強かったことを表しているのかもしれない。

参考資料：『伯耆民談記』『上齋原村史』『姓氏家系大辞典』『系図綜覧』『羽衣石南条系図』、戦国浪漫HP  
協 力：秋成知造

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733